

- 2 たなべ未来創造塾生の修了式。
3 「森林の育てびと」育成・確保対策事業を実施。



SDGs 推進に向けた取り組み

未来へつながるまち「田辺市」を目指して
～1000年をつなぐ熊野の保全と継承～

2030年のあるべき姿
熊野は、古くから癒やしと甦りの地として、貴賤男女の隔てなく、浄土を問わず、何人をも受け入れてきた。「熊野古道」は、世界中から人々が訪れる巡礼の道として、今なお歩き継がれている道であると同時に、人々が木々を育て、土を耕し、生活を営むために歩いてきた道でもあり、その両者によって千年にもわたる、保ち続けられてきた道こそが「熊野古道」である。

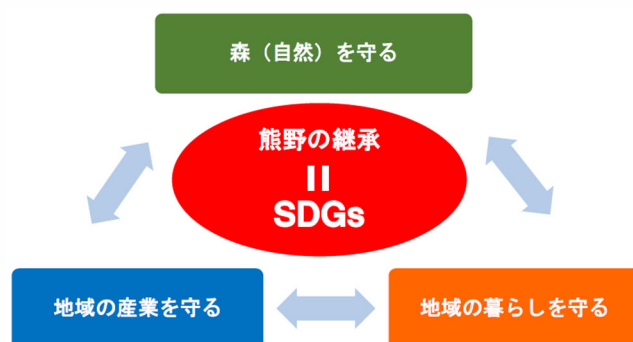
この地に暮らし、里山を守り、何人をも受け入れてきた「まち」の文化は、田辺市の個性の源であり、SDGsの「誰一人取り残さない」という理念にも合致し、経済・社会・環境の三側面が調和した現代のSDGsそのものである。

その一方で、人口減少、後継者不足によって、農業、林業など「熊野古道」を支えてきた里山の営みと熊野の歴史や文化を次の世代に継承していくことが困難になってきている。

が、この地に暮らす私たちのためには、千年先も熊野を継承していく責任があり、それが、SDGsで目指す未来の中で、田辺市が果たすべき使命であると考えている。森を守り、地域の産業と暮らしを守ることに、未来につながる「まち」を実現していく。

経済・社会・環境の三側面をつなぐ統合的取り組み
田辺市が目指す2030年のあるべき姿の実現のためには、いずれの側面においても、その鍵を握る人材の育成が必要であると考えている。

森林整備や森林環境教育を通じて次世代を担う人材を育成するとともに、産官学金の連携の下、地域課題の解決や地域資源の活用をビジネス手法で考えるローカルイノベーションを育成し、さらに、都市部の人材との交流を通じて関係人口を創出することにより、熊野流を通じて関係人口を



創出することにより、熊野地域の未来を拓く「ひとづくり」を推進することで、三側面の相乗効果を生み出していくことを目指す。



4 熊野 REBORN PROJECT
5 森林環境教育プログラム事業

地域特性と課題

田辺市は、紀伊半島の南西側、和歌山県の南部に位置し、近畿最大の面積を有している。
また、西よりの海岸部に都市的地域を形成し、そこから東向きには森林が大半を占めている。
人口は約7万人で、第1次産業は梅・みかんを主体とする果樹栽培、第2次産業は食料品・木材・木製品製造業、第3次産業は市街地の商業・サービス業と山間部の観光業が主な産業である。
地域資源として、「熊野

古道」として知られる世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」や、世界農業遺産「みなべ・田辺の梅システム」という2つの世界遺産がある。
さらに、日本三美人の湯の一つである龍神温泉をはじめ、熊野詣、人の心と体を癒やした日本最古の温泉である湯の峰温泉、河原全体が温泉となっている川湯温泉など、多様な独特で歴史的な温泉が山里に点在している。

このほか、ナショナルト

ラスト運動先駆けの地である天神崎やファミリールービーチとして人気の高い田辺扇ヶ浜海水浴場、梅の香り漂う紀伊石神田辺梅林、自然が創り出す滝と渓谷を満喫できる百間山溪谷など、豊かな自然や文化、資源があふれている。

一方で、地域の課題としては、人口減少と高齢化による第1次産業の後継者不足、新型コロナウイルス感染症の影響で国内外からの観光客の激減があり、今後、熊野古道

だけでなく百間山溪谷や天神崎をはじめとする多様な自然資源を生かした新たな観光客層の開拓、観光業と並ぶ地域の主要産業である第1次産業の担い手の育成、若者が働きたいと感じる魅力ある仕事づくり、地域コミュニティの再生、千年以上にわたり守られてきた熊野の歴史的・文化的景観の継承、自然資源の管理と保全、次世代を担う子どもたちへの教育の充実に取り組む必要があると考えている。



1 「熊野 REBORN PROJECT」のフィールドワークの様子。

熊野古道沿いの展望台から望む熊野の山々。

人口（令和2年国勢調査）：6万9870人
面積（参考）：1026.91平方キロメートル





田辺市企画部長
山崎 和典さん

田辺市の未来都市に向けての取り組み

取り組みを実施するに至った経緯

田辺市でも人口減少・高齢化は大きな課題です。そうしたことから、移住施策にも力を入れていますが、地方創生においては、単に住民票の数を競うのではなく、住民票がなくても何人も地域を訪れ、都会に住みながら地域に関わる人材を創出し、獲得していくことで新たな価値を生み出すことができると思っています。

そのためには、地域で暮らす人の魅力、地域で輝く人材が地域外の人を惹きつけることに主眼を置き、地域で輝く「人づくり」を中心においた地道な取り組みを、一つ一つを積み上げていこうと考え、地域にコミットするローカルイノベーターを育成する「たなべ未来創造塾」や、「熊野REBORN PROJECT」、「ことらぼ」などの関係人口づくりに取り組むことになりました。

また、森林環境譲与税

の額が全国第4位の田辺市にとりましては、地域の大部分を占める森林の管理及び保全における体制の構築は、熊野の景観保全において喫緊かつ重要な課題であることから、森林経営管理制度に基づく森林整備の中に人材確保に向けた新たな仕組みを取り入れ、「森林の育てびと」育成・確保対策事業」として取り組むことになりました。

さらに、将来にわたって環境問題をはじめとする地域課題の解決に積極的に取り組む人材を育成することも重要であり、また、地域の企業と連携して、次世代を担う子供たちが森林でのフィロドワーク等を通じて主体的に解決する思考を身に付けることができる機会を創出するため、「森林環境教育プログラム開発事業」にも取り組むことになりました。

ステークホルダー間の連携のあり方

人材育成において、行政

取り組みにあたり、乗り越えるべき課題

「まちづくりは、人づくり」と言われるように、「人づくり」の重要性は理解していても一朝一夕にできるものではありません。また、行政だけでできるものでもありません。多様なステークホルダーに関わっていただけたお陰で「たなべ未来創造塾」や関係人口づくり事業などの取り組みが成り立っていると言っても過言ではありません。

「たなべ未来創造塾」は、他の地域で成功していた取り組みに学び、田辺市に合った形にアレンジしたのですが、指導していただいた大学の先生から投げかけられた「コンサルに丸投げはダメ！行政職員が自ら考え、汗をかけ！」を忠実に守り、地道な取り組みを進めてきたことが、関わってくださった全ての人に拡がり、今に至っていると思っています。

これらのことから、自分事として取り組んでくれ

る人をいかに増やしていくかが重要なポイントであったと考えています。

今後の展開

「たなべ未来創造塾」の修了生が生み出したビジネスプランの実行率は約7割で、農業や林業だけでなく、新商品や新サービス、また、子育て支援や環境問題など多岐に渡り、田辺市が抱える様々な分野の地域課題の解決につながるものです。「たなべ未来創造塾」の仕組みは、持続可能な社会の創り手の育成を通じ、SDGsのすべてのゴールの実現に寄与するという「ESD（持続可能な開発のための教育）」の考え方も合致すると思っています。

今回、自治体SDGsモデル事業に選定されたことを契機に、たなべ未来創造塾修了生を核として、関係人口創出事業修了生だけではなく、並行して実施している「プチ起業塾」や地元の高校生を対象とした「神島塾」等も含めて、つながり続ける

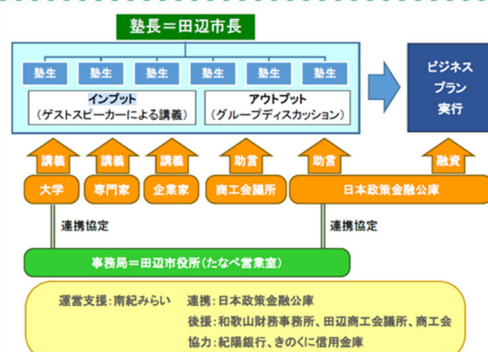
は「場」を創り、そこに意欲のある多様な市民やサポーターが集い、自分たちで考えて行動でき、化学反応を誘発するオープンイノベーションの仕組みが求められていると考えています。

「人づくり」の中核事業である「たなべ未来創造塾」においては、日本政策金融公庫や熊本大学と連携協定を結び、産官学金が一体となった伴走体制で塾生を育てており、関係人口づくり事業では、(株)YAMAP、(株)日本能率協会マネジメントセンター、(株)ソフトコト・プラネットと連携しています。

また、「森林環境教育プログラム開発事業」では、先駆的DMOに選ばれた(一社)田辺市熊野ツーリズムビューローが中心となり、森林組合、地元木材加工会社、財産区だけではなく、「たなべ未来創造塾」の修了生も多数巻き込み、地域一体となって取り組みを進めています。

このことができる仕組みを新たに構築することで、CSV（共通価値の創造）による次なるビジネスが生まれる環境を整えてまいります。

そして、こうした取り組みが、SDGsやウェルビーイングの実現につながり、誰もが住み続けられるまちとなり、千年先も熊野を継承していくことにつながると信じています。



2 ナショナルトラスト運動の先駆け地「天神崎」。“和歌山のウユニ塩湖”とも呼ばれ、注目を集めている。

3 川から温泉が湧き出る熊野本宮温泉郷の一つ「川湯温泉」

4 和歌山県が国内生産量の6割以上を占める「梅」。写真は、梅のトップブランドである「南高梅」。

1 熊野古道発心門王子から伏拝王子への道中に佇む「道休禅門」。かつて道半ばで倒れて、熊野本宮大社まで行き着くことなしに行き倒れた方々を供養しているお地藏様で、今も冬になると、寒くならないようにと地元の人がわら帽子をかぶせている。